吾輩は猫である

第 I 章

（原作：夏目漱石）



吾輩は 猫である。名前は　まだない。

生まれた ばしょは わからない。暗い しめった ところで 泣いていた らしい。吾輩は そこで はじめて 人間に　会った。その 人間は わかい 学生だった。学生は とても いじわるだった。学生は、ときどき 猫を たべる　そうだ。しかし 吾輩は　へいきだった。学生の手に のった　ときは、なんだか 不思議な きもちだった。そのとき はじめて ゆっくりと 人間の　かおを 見た。とても へんだった。猫には たくさん 毛があるが、人間の かおは スープの ボウルのようだった。それに かおの まん中には やま がある。その やまには あながある。 人間は そこから けむりを 出す。それは たばこの けむり　らしい。吾輩は たばこの けむりは きらいだ。

しばらく この 学生の 手のひらで 気持ちよく していた。しかし 学生は とても らんぼうに 歩き はじめた。とても 目が まわる。気分が　わるくなる。もう ダメだと　思った。すると、きゅうに ほうりだされた。吾輩は 気を うし

なった。

目がさめると 学生は いない。吾輩の 兄弟は だれも 近くに いない。大すきな 母も いない。それに、まわりは とても 明るい。目を あけられない。ゆっくりと 歩こうと した。体が とても いたい。吾輩は のはらに すてられたのだ。

なんとかして のはら から 出た。目の前に 大きな 池がある。吾輩は 池の前に すわって 考えた。よい 考えは 出てこない。また ニャーニャーと 泣(な)こうか。そうしたら 学生は もどってくる だろうか。ニャーニャーと 泣いた。でも だれも 来ない。そのうち 池の上を 風が ふき はじめた。暗くなって きた。おなかが とても へって へきた。泣きたい。でも 声が でない。とにかく なにか 食べものが ほしい。ゆっくりと 池の まわりを 歩きはじめた。とても いきが くるしい。がまんして 歩いた。そのうち 人間の においが するところへ きた。ここなら だいじょうぶか。へいの あなから 中に入った。大きな家だ。この穴が なければ 吾輩は おなかが すいて 死んで いただろう。吾輩は この穴を 今でも よく使う。あなを とおって となりに すむ 吾輩の女友だちに 会いに行く。大きな 家に 入ったけど、このあと どうしようか。だんだん 暗くなって きた。おなかは すいた。雨がふって 寒く なって きた。がまん できない。明るい ほうへ 歩いた。



人間が　いた。女だ。この女は 学生より　らんぼうだ。吾輩の　くびを つかんで　家の外へ ほうりだした。吾輩は　あきらめなかった。もう　一度　家に 入った。女は　また　吾輩を　外に ほうりだした。しかし 吾輩は あきらめない。女も あきらめない。これを ５回　くりかえした。そのとき、家の主人が やってきた。おんなは　吾輩の　くびを　つかみ、主人に 見せた。「この猫が　家に入ってきました。こまります。」主人は　鼻の したに　黒い　ひげが ある。それを さわり、吾輩を 見た。そして 言った。「それなら、家にいて よい。」女はくやしい　かおを　して　吾輩を　台所に　ほうりだした。吾輩は　この家を自分の　家にした。

　吾輩の　主人は　教師だ。ひるまは　いつも　自分の　へやに いる。かぞくは　主人が　勉強して　いると　おもっている。しかし、吾輩は　知っている。主人は　よく　昼寝を する。主人は　いが よわい。しかし　たくさん　食べる。食べた　あとに　くすりを のむ。そのあと 本を 読む。しかし、すぐに 眠くなる。そして、本に　よだれを　たらす。主人は　毎日　そう　している。教師はらくな　しごとだ。猫にも　でき　そうだ。しかし、教師は　大変な　しごとだと　主人は　いう。

　主人の　ほかは、だれも　吾輩の　友だちに　なって　くれない。なまえも つけて　くれない。主人だけが　吾輩を　かわいがって　くれる。主人は　朝、しんぶんを　読む。そのとき　吾輩は　主人の　ひざに　のる。主人は　昼寝をする。そのとき　吾輩は　主人の　背中に　のる。そのほかで　気に入っている

場所は、朝は ごはんの　入った　ようきの　ふたの　上、夜は こたつの　上、晴れた日は　窓の　よこだ。どの場所も　みな　あたたかい。とくに　気に入って　いるのは、子どもたちが　寝ている　ベッドの　中だ。子どもたちの　間はとても　あたたかくて　きもちがよい。しかし、子どもが　目をさますと　大変だ。大さわぎを　はじめ、それを　きいた　主人は　吾輩を　取りだし、しりをたたいて　しかる。

　人間の　子どもは　ほんとうに　わがままで　こまった　ものだ。吾輩をさかさにしたり、頭に　ふくろを　かぶせて　あそんだり　する。そとへ　放り出したり、かまどに　とじこめたりも　する。少しでも　逆らうと　みんなで吾輩を　追いまわす。この前も　吾輩が　マットを　つめで　ひっかいたら、主人の　奥さんが　とても　怒った。吾輩を　外に　放り出した。近くに　すむ白も　吾輩と　おなじ　きもちだ。白は　子猫を　四ひき　生んだ。しかし　白の 家の　人間は　四ひき　すべて　すてて　しまった。白は　涙を　ながして吾輩に　はなした。猫の 生活を　まもる　ために、人間どもを　ほろぼさなければ ならない　と言っていた。となりに　住む　みけは　主人の　さかなの　あたまを　たべようと　した。それは　みけの　ものである。しかし　すぐに　うばわれた。みけは　とても　おこっている。白の 主人は　軍人だ。みけの　主人は　弁護士だ。吾輩の　主人は　教師だ。軍人や　弁護士より　教師はもっと　やさしい。

　吾輩の 主人は　いろいろな　ことが　好きだ。たとえば、みじかい　詩を

書く。まちがいの　多い　えいごを　書く。ゆみを　ならう。歌を　ならう。ヴァイオリンを　ならう。しかし　それらは　どれも　へただ。よく　まちがう。でも　主人は　気にしない。そして　とても　ねっしんだ。トイレの　中では　うたを　うたう。近くに　住む　人は、　主人を　トイレ先生と　よぶ。トイレ先生が　また　トイレで　うたいはじめたと　いって　人びとは　わらう。主人は　気にしない。つぎに　主人は　絵を　はじめた。毎日　ねっしんに　部屋で　絵を　かく。なにを　かいているか　吾輩は　わからない。ある日、主人の友だちが　きた。主人は　「絵が　うまく　かけない。とても　むずかしい。」と　友だちに　いった。友だちは　「けしきや　ものを　かくと　いいよ。」と、アドバイスした。主人も　そう　おもった。友だちは　主人を　あざける　目で見た。しかし　主人は　気づかない。

　次の日、吾輩は　明るい　まどの　よこで　昼ねを　していた。主人が　吾輩の　後ろで　なにか　している。吾輩は　後ろを　見た。きのう　友だちが　アドバイス　したように　主人は　吾輩の　すがたを　かいている。吾輩は　たくさん　昼ねを　したので、からだを　動かしたい。しかし　主人は　ねっしんに　吾輩の　えを　かいていて　吾輩は　うごけない。がまんした。主人が　かく　吾輩の　すがたは　ひどい　ものだ。これは　猫では　ない。次に　かおに色を　ぬっている。色が　ちがう。猫の　色ではない。しかも　目が　ない。これは　ふしぎだ。主人は　ねっしんに　かいているので、吾輩は　うごけない。しかし　トイレに　いきたい。もう　がまんで　きない。吾輩は　立ちあがり

からだを　のばした。ゆっくりと　歩きだした。主人は　おこり　吾輩に　大きな　声で　いった。

「この　ばかやろう。」

主人は　怒ると　いつも　「ばかやろう」と　いう。トイレに　いきたい　だけなのに「ばかやろう」とは　しつれいな　言いかただ。人間が　する　わがままも　これくらいなら　がまん　できるが、もっと　ひどい　はなしを　きいた。

　吾輩の　いえには　ちゃの　はたけが　ある。吾輩は　いえが　さわがしいときや　ひるごはんを　たべた　あとに　よく　くる。あるとき　そこに　いくと　黒い　大きな　ねこが　ねていた。吾輩は　おどろいた。黒い　ねこは目を　ひらくと　いった。

「おまえは　だれだ。」

「吾輩は　ねこである。名前は　まだない。」

吾輩は　できるだけ　いつもと　おなじように　こたえた。

「どこに　すんでいる？」

ずいぶん　しつれいな　いいかただ。ここは　吾輩の　いえの　にわである。

「吾輩は　ここの　きょうしの　うちに　いるのだ。」

「そうだろうと　おもった。とても　やせているな。」

黒いねこは　いばり　つづける。大きな　からだ　なので　たくさん　食べている　らしい。

「きみは　だれなのだ。」

「おれは　くるまやの　黒だ。」くるまやの　黒は　力づよく　いった。黒は力は　つよいが　いばっている　だけだ。だから　ともだちが　いない。吾輩はしつもんした。

「くるまやと　きょうしは　どっちが　えらい　かな。」

「くるまやに　きまっている。おまえの　しゅじんを　見てみろ。ほねと　かわだ　けだ。」

「きみは　くるまやの　ねこなので　つよそうだ。ごはんも　たくさん　もらえるのか。」

「あたりまえだ！　おれは　たべもの　には　こまらない。おまえも　うちへたべに　こい。たくさん　たべて　ふとれるぞ。」

「いつか　いきたいよ。しかし　吾輩が　すむ　家は　くるまや　より　おおきいぞ。」

くるまやの　黒は　それを　きいて　おこった。そして　むこうへ　いってしまった。こうして　吾輩は　くるまやの　黒と　知りあいに　なった。

　その後、くるまやの　黒に　たびたび　会った。黒は　ある日　吾輩に　きいた。

「おまえは　ねずみを　どれくらい　とった　ことが　ある？」

吾輩は　あたまの　よさは　黒より　上だ。しかし　力は　ない。しょうじきにこたえた。

「まだない。　とろうと　したことは　ある。」

「そうか。そうだろうな。」黒は　じまんを　はじめた。

「おれは　３０，４０は　とったぞ。それくらい　かんたんだ。でもよ　いたちは　つよい。いちど　ひどい目に　あったことが　ある。」

「なるほど。」

「きょねんの　ことだった。　しゅじんが　いえの　そうじを　していた。　そのとき　ゆかの　したから　きゅうに　いたちが　とびだした。　おれは　いたちを　おいかけて　つかまえようと　した。　さいごに　いたちは　くさいにおいを　だして　にげていった。」　黒は　まえあしで　はなを　なでた。

「あれには　まいった。とにかく　くさかった。」吾輩は　黒に　もっと　しゃべらせた。「きみは　ねずみを　とるのが　とても　うまい。だから　そんなにふとっている。」ほめた　つもり　だったが、ぎゃくに　黒は　なげきはじめた。

「ねずみを　とるなんて　つまらない　ことだぜ。いくら　たくさん　とっても　すべて　しゅじんの　てがらだ。」こういって　黒は　おこった　ようにせなかの　毛を　さかだてた。

　黒の　はなしを　聞いて　吾輩は　ねずみを　とることは　しない　ことにした。黒と　いっしょに　ごちそうを　さがすことも　しなかった。ごちそうを食べるより　寝ていた　ほうが　気がらくだ。教師の　うちに　いると　猫も教師に　にてくる。気をつけないと　吾輩も　教師の　ように　胃が　弱くなりそうだ。

主人は　ちかごろは　絵が　ぜんぜん　うまくなっていない　ことが　よくわかっている。日記には　こう書いている。「多くの　人間は　自分に　できることや　自分に　できないことが　わかっていない。吾輩は　絵は　かかないほうが　よいようだ。」しかし、主人は　人に　よく　思われたい　という　きもちが　とても　強い。べつの　日記には　こう　書いている。「きのうの　夜、ゆめを　見た。だれかが　吾輩の　かいた　絵を　部屋の　壁に　かざってくれた。これはうれしかった。吾輩の　絵は　とても　りっぱに　みえた。しかし　やがて　目がさめた。絵は　へたな　ままだった。がっかりした。」

日記を　書いた　つぎの日、まるめがねの　友だちが　きた。「絵は　どうだい？」と　きいたので、主人は　言った。「きみの　アドバイスの　とおり　絵の　れんしゅうを　している。今まで　気づかなかった　かたちや　いろなど　よくわかる。アンドレア・デ・サルトの　教えは　さすがだ。」主人は　日記の　ことは　なにも　言わない。友だちは　わらって　言った。「あれは　ぜんぶうそ　なんだ。」「えっ？　うそって、なにが？」主人は　よく　わかっていないようだ。「アンドレア・デ・サルトの　ことだよ。あれは　わたしが　作った　はなしだ。ハハハ。」主人は　きょうの　日記に　なにを　かくだろうか。友だちは　さらに　つづけた。「この前も　ある　がくせいに　わたしが　つくりばなしを　した。がくせいは　それを　しんじて　がっかいで　多く　の人に　その　はなしを　した　ということだ。ハハハ。」

友だちは　さらに　つづけた。「それから、もっと　おもしろい　はなしがある。

せんじつ　ぶんがくしゃの　ミーティングで　ある　しょうせつに　ついて　はなしを　した。その中で、わたしは　うそを　いった。「このセリフは　すばらしい。」と。しかし、そのような　セリフは　しょうせつには　ない。わたしが　つくったのだ。

　ミーティングには　としうえの　ぶんがくしゃが　たくさん　いた。その中の　ひとりは　「そうそう、あれは　すばらしい　文だ。」と　いったのだ。あの　ぶんがくしゃは　しょうせつを　ちゃんと　よんでいない　ことが　わかった。わたしと　おなじだ。ハハハ。」「そんな　うそを　いって、もし　その　ぶんがくしゃが　しょうせつを　読んでいたら　どうする？」

　友だちは　おちついて　こういった。「そのときは、ほかの　本と　まちがえた、といえば　だいじょうぶだ。ハハハ。」友だちは　なんとなく　車やの　黒に　似ている。主人は　じぶんには　そのような　ゆうきは　ない　という　顔をしている。

　友だちは　つづける。「絵は　むずかしい　ものだよ。レオナルド・ダ・ヴィンチは　若い　でしに　お寺の　かべの　しみを　写せと　いった　そうだ。きみも　トイレの　かべの　しみを　かくと　おもしろいぞ。」

「また、うそを　いって　わたしを　だます　のだろう？」主人は　まだ　トイレの　しみを　かく　れんしゅうは　していない。

　車やの　黒は　足を　わるくした。毛は　つやが　なくなり、うすく　なった。目も　かがやきを　うしなった。げんきが　なくなり、ちいさく　なったようだ。

吾輩は　いつもの　庭で　会って　はなしをした。「いたちの　においと　さかなやの　ぼうは　もう　いやだ。」この後、車やの　黒には　会って　いない。

あかしろの　花は　ほとんど　おちた。冬の　日ざしが　みじかくなった。吾輩の　昼ねの　じかんも　みじかくなった。

主人は　まいにち　がっこうへ　ゆく。帰ると　しょさいに　入る。人が　来るのは　とても　いやがる。絵は　かかなく　なった。胃ぐすりは　やめて　しまった。子どもは　ようちえんへ　まいにち　ゆく。帰ると　うたったり、ボールで　あそんだりする。ときどき　吾輩の　しっぽを　つかんで　持ち上げる。

吾輩は　ごちそうは　もらえない。太っては　いない。びょうきには　ならないで　まいにち　生きている。ねずみは　決して　とらない。子を生むのは　いやだ。名前は　まだ　ない。吾輩は　このまま　きょうしの　うちで　生きてゆく　つもりだ。

（5406字）

（Original text by Sōseki NATSUME）

（2026.9 Simplified by Tsunemi TAKEDA）

この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例）出典：「たどくのひろば」（https://tadoku.info）

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.